



潤心啓発

令和6年9月19日
青梅市立泉中学校
学校だより第24号
校長 神田 哲男

泉中 HP

<https://www.city.ome.tokyo.jp/school/izumi-j/>



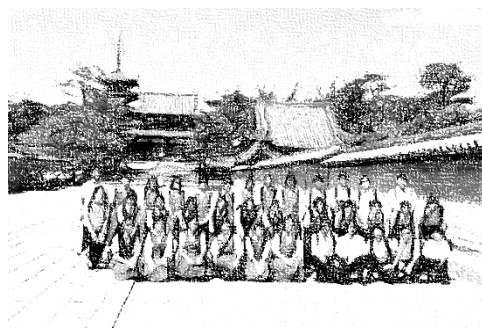
本物に圧倒された修学旅行

9月9日(月)～11日(水)の2泊3日、奈良・京都に修学旅行に行ってきました。約4か月間に及ぶ事前準備と学習に取り組み、実行委員会を中心に3日間、全ての行程に立派に臨みました。初日は、新大阪駅で新幹線を下車し、日本最初の世界文化遺産である法隆寺でバスガイドさんの説明をクラスごとに聞きながら周り、次に奈良公園に向かい公園内を班行動しました。特に、東大寺大仏殿・大仏には、調べた知識では想像できなかった大きさに驚きました。その後、宿舎である京都のお宿いしちように向かいました。夜は講演を聞き、京都の文化について学びました。

第2日の京都一日班行動では、計画通りに自分達の力で名所・旧跡を巡りました。残暑厳しい大変暑い日でしたが、どの班も班長を中心に協力し、宿に帰って来ました。夜は、大広間で友禅染体験に臨みました。疲れを吹き飛ばして作品づくりに励む姿もとても立派でした。

最終日は、半日のタクシー班行動で運転手さんから各寺社の見どころや京都の歴史、魅力をたくさん教えてもらいました。班ごとに昼食をすまし、戻ってきた京都駅での閉校式は、3日間の修学旅行のまとめとなる会でした。

泉中生としての一人一人が自分の修学旅行を真摯に振り返る雰囲気があり、心地よい一時を過ごすことができました。教科書で習ったことを自分の目で見て実感できたことや各自が責任を果たし協力し成長を感じさせるところと、甘さに負けてしまう学年の課題が見えた大変学ぶことが多かった3日間となりました。修学旅行に際し、様々な準備をしていただきました保護者の皆様、ありがとうございました。



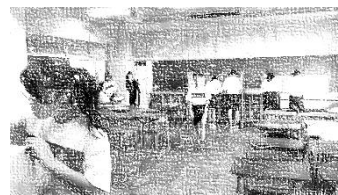
泉中のために立ち上がった勇氣
ある10名の立候補者に拍手!!

生徒会役員選挙

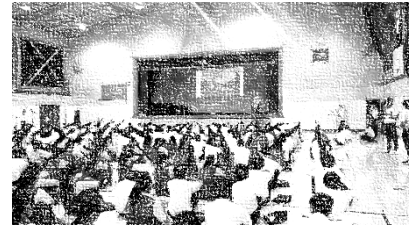
9月5日(木)、立会演説会および役員選挙の投開票が行われました。各クラスから選出された選挙管理委員会では公正な選挙が行われるよう運営をし、責任を果たしてくれました。立会演説会は、体育館で行われました。役員選挙には、10人(2年生6人・1年生4人)が立候補してくれました。

今回の投票では、青梅市から本物のアルミ製の投票箱と記載台をお借りし、選挙管理委員が考えたレイアウトを基にした投票部屋を各学年で作し、投票用紙も本物に近い泉中版投票用紙を作成し、緊張感のある雰囲気を作ってくれました。その成果もあり、熱い演説をしっかりと食い入るように聞いている生徒の態度や自分でしっかり考え緊張感のある投票ができたことは大変立派でした。

勇氣を出し、積極的に立候補してくれた10人には、心から感謝しています。立候補者および応援演説者投票前演説や応援演説を全員ノーマルで自分の言葉で話し、態度も立派でした。新生徒会役員のこれからの活躍に期待しています。



ピースメッセンジャー報告会 8月28日(水)



この夏、「青梅・羽村ピースメッセンジャー」として本校生徒が派遣されました。この事業は広島に行き、様々な平和関連事業を体験することで、戦争の悲惨さと平和の大切さを自らが考え、発信できる人材を育成するために実施しているものです。2市の中学校から選出された10名がチームを作り、活動しました。本校の教諭も代表指導教諭として帯同指導してくださいました。4回の事前研修と8月1日から3日の広島実地体験後、2回の事後研修を経て、8月17日(土)にプリモホールゆとりろで派遣報告会を行いました。本校でも2学期始業式に全校生徒に向け、改めて本校用にスライドで画像をまとめ、報告してくれました。以下は報告です。

私は平和記念資料館の入り口で 1 人の少女の写真に出会いました。その少女を見てとても痛々しい気持ちになりました。名前や年齢など何の情報もなくその写真だけがありました。そこでその少女が誰なのか、原爆の何が原因で怪我をしたのか、その後どうなったのか、たくさんの疑問が私の中で浮かびました。その答えは分からないまま 最後まで回りました。一番最後の展示で見つけたのは、入り口で見た少女の写真と 20 歳の時の藤井 幸子さんの写真でした。藤井 幸子さんは 30 代でがんが見つかり広島原爆病院で手術を受け、もち直しましたが、がんの転移により体調不良が続き再入院します。そして 1977 年に 42 歳で亡くなりました。最初の写真に添えられた解説に当時 10 歳だった少女は 爆心地から約 1.2km の自宅で被ばく、1 階で営んでいた食堂の椅子に座っていた時、開け放った扉から射し込む熱線を体の右側から浴び、爆風で飛び散ったガラス片で負傷とありました。平和記念資料館には原爆で火傷を負った人や崩れた建物の写真、ケロイドの写真が展示されていました。私は 資料館の中を見学しながら彼女がどうなったのか考えていました。想像しかできなかったけど最後の展示で答えが分かりました。それと同時に、入り口で少女の写真だけを展示していたのはなぜ?と新しい疑問が出てきました。その疑問を考えた時に最初の展示があったからこそ最後の発見があったり、展示されているものから幸子さんを当てはめて考えてみたり、展示されているもの同士がつながったり、新しい見方が出てきたと思います。幸子さんの写真をきっかけに、私は展示物同士のつながりが見えたり、考えの理解がより深まりました。

3日間の中で被爆体験者である、豊永 恵三郎さんから当時のお話を聞きました。当時9歳だった豊永さんは自宅から離れた病院に一人で向かっている途中原爆が投下されました。その後豊永さんは祖父母の家に避難しました。翌日祖父と一緒に母と弟を探しに行きますが、見つけることができたのは原爆投下から4日後でした。豊永さんの母と弟は爆心地から、約 1 キロの場所で被爆しました。母が弟の上にかぶさり、守ったことで弟は無傷でしたが、母は頭、腕に大火傷を負い、目が見えなくなりました。怪我がひどくて最初は母だとわからない状態だったそうです。弟がいなければ、気づかなかったと仰っていました。その後看病のかいもあって母も回復し、三人で暮らすことができたそうです。豊永さんは自身も被爆した経験から、原爆の被害にあったにも関わらず、保障を受けられなかった在外被爆者の支援も行っています。実際に原爆を体験された豊永さんにお話を聞いて、その時のことが頭の中で想像できたり、言葉の重みを感じ、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。

私はピースメッセンジャーの活動を通して、今ある日常や平和が当たり前ではないのだととても強く思いました。原爆が投下された1945年8月6日、私達と同じ学生も大勢なくなりました。当時の学生は建物疎開などの戦争の準備を行っていたため、学校に行きたくてもいけませんでした。勉強したくてもできませんでした。原爆が投下されたことによって、普通でない日常さえも奪われてしまったのです。大好きな家族や友達にも会えず、誰にも見つけてもらえないまま今も行方不明となっている人は数え切れません。では皆さんはどのように生活をしていますか?「死ね」や「消えろ」などの言葉を使っていますか?その言葉に傷つき、命を落としてしまう人がいるかもしれません。私は友達や家族に思いやりをもって接していきたいです。一つの言葉で傷つく人もいれば、嬉しくなる人もいます。相手のことを考えて接すると喧嘩や、争いがなくなると思います。私達は平和な世界を保っていくために、今ある日常、命に感謝しながら一人一人が思いやりを持ち、精一杯生きていくことが大切だと思います。